

第14回

## 十字軍の時代

監修・講師  
大月康弘

### 学習のねらい

11世紀末、西ヨーロッパは、カノッサの屈辱（1077年）によってローマ教皇が皇帝より優位な立場に立つ政治体制となった。この西ヨーロッパ世界で、イスラム勢力が占領する聖地エルサレムの奪回を目的とする運動、十字軍が起こる。第1回の十字軍（1096～99年）を含めて、計7回の遠征が行われたが、最終的には聖地を奪回することはできなかった。しかし、この遠征によって西ヨーロッパの人々は、地中海世界の異文化やモノに触れることとなった。11世紀から13世紀にかけて行われた十字軍の背景と、西ヨーロッパの社会に及ぼした影響についてみていく。

＜十字軍の背景＞

エルサレム　イスラム勢力　ウルバヌス2世

＜十字軍とフリードリヒ2世＞

シチリア　アル・カーミル　多文化共存

＜封建社会の変化と中世都市の成立＞

地中海世界　遠隔地交易　中世都市　シャンパーニュの都市

### ■ ■ ■ 十字軍の背景 ■ ■ ■

**エルサレム**はキリスト教徒にとって重要な聖地だ。だが、そこは7世紀以来、アラブ・イスラム勢力の支配下にあった。聖地エルサレムの奪回は、キリスト教世界の支配者にとって長年の懸案だった。カノッサの屈辱を経て、西ヨーロッパ世界で優位に立っていたローマ教皇**ウルバヌス2世**は、11世紀末、ビザンツ皇帝の救援要請を受け、聖地エルサレムへの軍隊の派遣を宣言。この呼びかけに応じて、西ヨーロッパの王や貴族たちが、1096年、第1回十字軍を結成した。第1回十字軍ではエルサレムを奪還したが、それ以降の遠征では異なる思惑で行われたこともあり、結局、聖地奪回は実現しなかった。

他方、イスラム社会では、7世紀以来、キリスト教徒、ユダヤ教徒の人々がアラブ人と平和に暮らしていた。十字軍の攻撃を受けて、イスラム社会の中にキリスト教社会に対する反感が生まれる。イスラム勢力によるキリスト教、ユダヤ教社会への弾圧、攻撃も引き起こされたことは、十字軍がもたらした負の影響だったといえる。

## ■■■ 十字軍とフリードリヒ2世 ■■■

神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世（在位 1220～50）が指揮した第5回十字軍は、イスラーム勢力と和平を結んで、エルサレムの統治権を得た唯一の例外だった。12～13世紀、彼が育ったシチリアには、ノルマン人、アラブ人、ギリシア人が共生していた。王を宮廷で支える人びとも多様で、フリードリヒ2世はラテン語、アラビア語、ギリシア語に通じていた。エルサレムを支配するアラブ勢力との巧みな外交で、戦うことなく聖地の統治権を手にしたフリードリヒ2世。シチリアでの多文化共存社会に育った彼だからこそ、戦わずして和平交渉を進め、エルサレム王ともなれたのだった。

## ■■■ 封建社会の変化と中世都市の成立 ■■■

西ヨーロッパ世界は9世紀以来、地中海世界との交流が薄れていた。これにより、地中海世界の商業ネットワークから外れ、地域内で自給自足の生活をする封建社会となっていた。ところが、十字軍が行われると、人々は地中海の異文化と珍しい文物を知った。これにより彼らの中に、**遠隔地交易**を行う「商人階層」が誕生した。彼らは、基本的に農村社会だった西ヨーロッパ世界に「中世都市」と誕生させた。都市は珍しい物品が取り引きされる市場を形成した。シャンパーニュの大市が行われたプロヴァンは、典型的な「中世都市」である。各都市の市民（ブルジョワの起源）の中に、キリスト教信仰にもとづく「ヨーロッパ」の一体感が生まれた。十字軍が西ヨーロッパにもたらしたのは、地中海世界の文物と、人々の一体感だった。

### 考えてみよう 調べてみよう

- 十字軍の時代がもたらした政治、宗教、社会的な影響をまとめ、その後の西ヨーロッパにさらにどのような影響を与えたのか調べてみよう。
- ドイツ、フランス、イギリスの場所と、エルサレムとの距離を地図上で測ってみよう。
- 神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世が育ったシチリア島には、多くのアラブ人とギリシア人が住んでいた。シチリアの場所と王宮のあったパレルモの位置を確認してみよう。
- 多文化が共存した地中海世界のシチリアと、カトリック=キリスト教で統一された西ヨーロッパ社会との違いについて考えてみよう。